書き下ろし――――5

新本格推理小説全集

松本清張 責任監修・解説

閃光の遺産

三好　徹

書き下ろし・新本格推理小説全集5

閃光の遺産

定価三八〇円

昭和四十二年二月二十八日　第一刷

著者　三好徹

発行者　鈴木敏夫

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　藤田製本株式会社

発行所　読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一

大阪市北区野崎町七七

北九州市小倉区中津口七三の二五

©, TŌRU MIYOSHI, 1967

閃光の遺産

■ 三好　徹 ■

読売新聞社

新本格推理小説に寄せて

松本清張

推理小説は昭和三十四、五年から爆発的な流行をみせた。これは、その少し前から海外の推理小説の翻訳ものが読者に迎えられていたことも下地になっていたのだが、それまでの普通の小説が、とかく、単調、難渋、平板に陥っていたことにもいくらか関係があるのであろう。読者は面白い小説に飢えていたともいえる。以前から推理小説の読者は知識人だったが、今度は同時に、新しく婦人層をも加えた。

その期の推理小説を考えると、傾向的には社会派、風俗派に分けられ、社会派を細分すれば、組織を主体とした、たとえば政、財界の内幕的なものや、汚職事件などがとりあげられ、また個人生活と組織とのつながりも題材となった。これは、文壇で組織と人間とが論じられたところに大体一致する。

風俗派のそれは当然に市井の暗黒面や恋愛、愛欲の姿が材料になった。アメリカのハードボイルドを下敷にしたものは街の暗黒面を描くのに役立ったし、男女の愛を描写するに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も推理小説的手法が在来の平板な小説より新鮮味を与えた。

こうしてみると、推理小説はあらゆる小説の題材分野を吸収していたことになる。その分野によって個別化していたそれまでの普通の小説題材を推理小説は綜合結集したともいえる。それから、その描写にしても、何となくはじまって何となく終るというような普通の小説と違って、とにかく設計された構成が存在していた。普通の小説だと、書きながら途中でいくらでも構想が変えられるが、推理小説ではそうはゆかない。伏線を縦横に引き、その伏線を最後に全部生かして一つの焦点に方向集中しなければならないからである。推理小説の読者は、伏線を絶えず気にしているのだ。

ジャーナリズムは読者の傾向に常に敏感である。当時の推理小説ブームの半分はジャーナリズムがつくったようなものである。雑誌「宝石」を編集していた江戸川乱歩が普通の小説作家に推理小説を依頼して回ったことなどもあって、途中からこの分野に参加する作家、新人群の出現など、推理小説は満開のお花畑の観を呈した。文壇小説さえ推理小説的手法を用いるのが流行した。

しかし、正直にいって、この時期に推理小説はその本来のあるべき性格を失いつつあった。その理由の一つは題材主義に倚りかかりすぎたためであり、一つはジャーナリズムが多作品を要求したため不適格な作品が推理小説の名において横行したことであり、もう一

つは、その結果、推理作家自体の衰弱を来したことである。これは反省すべきことであった。推理小説本来の興味は、アラン・ポウのジュパンもの以来、「謎」が伝統であった。「知恵の闘い」（木々高太郎説）なのである。その意味では佳作がそうむやみと出るはずはなく、昭和三十四、五年から数年までのブームは空洞だったともいえる。あれは当時のジャーナリズムが半分ふくらました幻のブームで、現在の状態が普通である。いまさらジャーナリズムが「ブームの衰退」を云うのはおかしい。

今や推理小説は本来の性格にかえらなければならない。社会派、風俗派はその得た場所に独立すべきである。本格は本格に還れ、である。

しかし、ここまできた推理小説の形式・内容が、戦前のそれにもどるべくもない。社会派・風俗派の通過は、ある意味において推理小説の視野をひろげ、対象を掘り下げ、程度を高めたことである。技術も前進させたと思っている。現時点で本格ものに還るということは、以上の基礎に立ったものであり、それからの新しい発展である。その意味で、わたしはさきに「ネオ・本格」という言葉を口走ったけれど、このシリーズでは「新本格推理小説」となっている。

およそ文学上の一つの発展には、作家によるグループ的な活動が必要である。それには有能な作家の参加が不可欠なことはいうまでもない。

幸いに読売新聞社がこの趣旨に副って新企画を打出した。いくら文学運動だといっても与えられる場がなければ手も足も出ない。わたしたちは欣然としてこの企画に参加することになった。執筆陣はこの書き下ろしに異常な情熱を燃やしている。推理小説本来の姿は、雑誌に輪切りにして発表される連載ものではなく、書き下ろしの封切版にある。本格ものはそうでなければならぬ。読者は、雑誌の上では一字もお目にかからなかった書き下ろし小説を、心ゆくまで愉しまれるに違いない。

わたしは、執筆者諸氏より年齢的にいささか先輩である故に、監修という役目をつとめることになった。その選択はわたしの責任による。顔ぶれにおいて、間違いない作家ばかりである。しかし、もちろん、ほかにすぐれた作家もあることだし、もし、第二の企画があればぜひ次の陣列に加ってもらうことにする。

各作家の傾向についての解説は各巻でわたしが担当するが、なにしろ、封切版だからわたしもゲラ刷をよむのがたのしみである。ただ、監修の責任上、各作品については前もって大体の構想について作家から聞いて意見も出している。ゲラを読んでも不審な点はダメを出して、読者への責を果すつもりである。

閃光の遺産

装丁　重原保男

第一章

1

その女は、あきらかに、迷っていた。桑沢記者がスダレ越しに見ていると、通信局の建物の前に立って、入ろうか入るまいかと、決断を下しかねている様子だった。顔に比べて大きすぎるほどに感じられる瞳が、間断なく上下に動いて、入口の上部に掲げられている山陽日報呉通信局の標札や、ドアに貼られている社章を、せわしなく見つめている。

若い女である。二十四、五歳というところだろう。どちらかといえば、平凡な顔立ちであるが、七月初旬の朝の強い陽差しをうけている顔、周囲の明るさに困惑しているようなその色白の顔に惹きつけられて、桑沢は声をかけた。

「なにか、ご用ですか」

スダレをたくし上げて顔をつき出すと、瞬間、彼女は身を守るように腕で脇腹をおさえ、それか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら微かに慄えを帯びた声で問いかえしてきた。
「あの……山陽日報の広告のことで、ちょっとおたずねしたいことがあるんやけど、こちらでわかるでしょうか」
桑沢は軽い失望にとらえられた。隣りの広島市に本拠をもつ山陽日報の、かれは呉通信局の記者だが、記事を書くという本来の職務以外にも、地方通信局の局員はこの種の雑用も受け持たされる。むろん、積極的に広告を集める責任は負わされていないが、申込まれれば、事務処理をしなければならなかった。
桑沢は気のない声を出した。
「広告の申込みですね？」
意外なことに、彼女は激しく首をふった。
「違うんです。この広告のことで、ちょっとおたずねしたいんです」
若い女は手にしていたハンドバッグから、小さな紙片をとり出した。
桑沢は窓ごしに、その紙片を受けとった。それは活字の特徴で、ひとめで自社のものとわかる二段広告の切りぬきだった。
上部に太いゴシックで「光夫さん」とあり、その下に「どうか帰ってください　早苗」と印刷されていた。
数多くあるわけではないにしても、ときおり見かけるアピール広告である。家に戻らない光夫と

いう男に帰ってくれと女が訴えているのだ。この種の広告にどの程度の効果があるのか、桑沢には見当がつきかねたが、といって、文面その他にとりたてて不審な点はなかった。桑沢は、紙片を女に戻していった。

「この広告がどうかしたんですか」

「おかしいんです」

女の声には、ひたむきな響きがこもっていた。

「おかしいって、どこがですか」

「そこに広告してあることは、うちらのことだと思うんですけれど、そういう広告を頼んだ覚えがないんです。いったい、だれが、この広告をおたくの新聞に出したのでしょうか」

桑沢は混乱した。相手のいうことがよくのみこめなかった。女は苛立たしげに言葉を続けた。

「うちの人は、光夫といいます。わたしも早苗という名前ですけど、わたしはこの広告をおたくにお願いした覚えがないんです」

「なるほど」

桑沢は相槌をうった。一種の時間かせぎである。と同時に、相手のいいたいことが、ようやくわかりかけてきた。念を押すように、

「そうすると、あなたのご主人が光夫さんで、あなたの名前も、その広告にあるように早苗さんとおっしゃるわけですね」

「ええ」
「それじゃ、これは偶然の一致じゃないんですか。あなたと違う別の早苗さんが、やはり別の光夫さんに、家に帰ってください、と訴えているわけでしょう。あなたがたにはご迷惑だったかもしれませんが、そういう偶然の一致は、こちらとしても、どうにもできませんよ」
「でも、うちの人も、家を出たきりで、戻ってこないのです。それに、この広告は、一昨日の朝刊に載っていたんですけれど、その日の朝は、うちの人は、家にいたんです。わたしは、二晩も帰ってこないので心配でたまらなかったところに、その広告のことをご近所の方からいわれて、びっくりしてしまったんです」
桑沢は、坐り直して話をきく必要がある、と思った。かれは立ち上って、通信局のドアをあけ、彼女を事務所のなかへ招じ入れた。
若い女は、尾関早苗と名乗った。桑沢のすすめた木の椅子に浅く腰をおろし、伏目がちに語った内容を要約すると、ほぼ次のようになる。
尾関早苗はことし二十四になる。彼女は二つ年上の大竹光夫と結婚しているが、まだ籍は入っていない。したがって、二人の間柄はいわゆる内縁関係ということになるが、それは半年近くも続いていて、早苗にいわせれば、夫婦仲は円満そのものだった（事務的にメモをとった桑沢に、そのことを信じてもらいたいのか、そのとき早苗は、ほとんど訴えるような口調で「本当にうちは、光夫さんを愛していたんです。あの人のことを悪くいう人もいますけど、根は気の弱い、いい人なんで

す。それは、わたしが一番よく知っています」といった)。

二人が知り合ったのは、市内の繁華街にある「ムーンライト」という喫茶店で、早苗はそこのウエイトレスをしていた。光夫は、そのころ、保険の外交員をしていて、勤めの合い間にムーンライトへきてコーヒーをのんだ。最初のうちは、仲間といっしょにきていたが、そのうち独りでくるようになり、親しく口をきくようになった。結婚したのはことしの三月、同時に早苗はムーンライトを辞めたが、二カ月ほど前、ある事情があって光夫は勤めを辞め、早苗は再びムーンライトで働くようになった(ある事情とはなにかについて、早苗は言葉を濁した。桑沢も、話の本筋とは関係がないので、それ以上は訊かなかった)。

七月八日の朝、早苗はいつものように、九時半に、家を出てムーンライトに向かった。ムーンライトは、朝十時から夜十一時半まで営業しており、ウエイトレスは、朝番と午後番にわかれている。早苗は、店主に頼んで、朝番だけにしてもらっているので、夕方六時には帰宅できる。

二人の住居は、市の西北の吉浦町にある六畳一間に台所、浴室つきの貸家だったが、その日の夕方早苗が帰宅してみると、光夫の姿がなかった。保険会社を辞めてからの光夫は、職を捜しに、週に一、二度は広島へ出ていた。広島はなんといっても中国地方第一の都会だったし、呉市よりもはるかに賑やかである。その上、大竹光夫は、前に広島に住んでいたことがあるとかで、知り合いも多いのだ。

光夫の姿のないことを、早苗はあまり気にしなかった。ムーンライトの帰りに買った魚を焼いて、

夕食の仕度をととのえた。しかし、その夜は、早苗は、独りで、冷めてしまった食事をとらねばならなかった。ことによると、光夫は旧友にひきとめられて、泊まってしまったのかもしれなかった。以前、勤めているころはマージャンで徹夜したといって、帰らなかったこともあるのだ。

翌日、早苗は、さすがに不快を感じながらも、朝食の仕度をととのえてから、「きょうは出かけないでください」と書き残して出勤した。ところが、夕方戻ってみると、食事も書き置きも、そっくり、そのままの状態で残っていた。光夫が戻ってきて、手をつけたりいじったりした様子はどこにも見られなかった。

マージャンにしては長すぎた。光夫は勤めてないが、マージャンのメンバーが三人とも光夫と同じようにからだをもてあましているとは考えにくかった。交通事故にでも遭ったのではないかと思うと、早苗の心には、不安の雲がむくむくと沸き起こってきた。

彼女は、近所のタバコ屋の電話を使って、呉市警へ問い合わせてみた。交通事故は二日間のうちに何件か発生していたが、被害者に大竹光夫の名はないという返事だった。

早苗は、家のなかを、くまなく探ってみた。思い当たるふしはなかったが、光夫の方で感情を害し、家を出て行ったのではないか、と気になったのだ。

なくなっているものは、なにもなかった。印鑑や貯金通帳（といっても一万円足らずしか入っていないが）は茶ダンスに残っていたし、旅行あるいは長期の外泊に必要と思われる品物、たとえば鞄とか着がえの下着類も持って出た形跡はなかった。ただ、靴と夏の背広が見えないだけだった。

二日目の孤独な夜を、早苗はまんじりともせずに過した。十二時近くまでは、足音や車の音がして、そのたびに彼女は背筋を硬くして玄関のドアが叩かれるのを待ったが、ついに光夫は帰ってこなかった。

早苗は、ムーンライトを休む決心をして、タバコ屋から電話をかけた。そのとき、タバコ屋の主人が気ずかわしげに声をかけてきた。

「旦那さん、どうしなさったんじゃろね」

虚をつかれて、早苗はとっさのうちに返事ができなかった。追い打ちをかけるように、タバコ屋の主人はなおもいった。

「広告を見たけれど、まだ連絡ないんですか」

「広告って？」

「山陽日報に出されとったじゃないですか」

背後から不意打ちをくらったような気がしたが、その場はとりつくろって、早苗は急いで家に戻った。そして、二日前の新聞、正確にいえば、山陽日報七月八日付けの朝刊社会面に、「光夫さん、どうか帰ってください　早苗」という二段組みの広告を見出したのである。

悪い夢から醒めたいと願うかのように、早苗は痙攣じみたしぐさで首をふってから、桑沢の心にしみ透るような憂しげな眼をした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com